

図1 奈良時代の官衙関連遺跡と前時代の古墳密集地帯

2 古墳時代後期は「お町」誕生の助走期間

しかし、富士・沼津が奈良時代に突如発展したかといえば、必ずしもそうではない。古墳時代後期から飛鳥時代（6世紀後半から7世紀）には、荒廃した富士・沼津において、これまでよりも規模の大きな集落が古代東海道沿いに登場し始め、さらには愛鷹山南麓にはこれら集落の有力者が葬られたと考えられる古墳が約1,000基以上も築かれていることが、近年の集落の調査や古墳の再整理で明らかになってきた。特に1,000基以上という数は東海地方でも最大級となる。

これらの遺跡の出土品をみると、集落では鉄製品やガラス玉を製作していたことを示す手工業製品（写真1）や水産加工具と考えられるナベなどがあり、また古墳の副葬品には刀や鉄鏃（やじり）などの武具の他に、物資運搬においても重要な役割を果たしていた馬の存在を示す馬具、製糸や織物のための紡錘車や針、加工具である刀子、山河の開発を行うのに使用したであろう斧や鎌などがある。これらの遺物には渡来系技術者との関連を示すものもあることから、愛鷹山に葬られた人々は馬や当時最先端の道具等を用いながら地域を治めていた人物であると推定される。つまり、愛鷹山に眠る古墳の被葬者たちこそが5世紀に荒廃した地域を整え、その後の社会の礎を築いた「開拓者」といえるのではないか、いわば奈良時代における富士・沼津の発展は、古墳時代後期に行われた開発が下地になっているのではないか、そのように最新の研究成果から考えられるようになってきているのである。



写真1 鍛冶道具

3 富士市・沼津市の共同開催の意味

以上のような背景を見出すことができる古墳時代後期の古墳群であるが、その分布の中心は沼津市西部の石川以西、富士市東部の須津や船津以東にあることがこれまでの調査で明らかになっている。また大規模な集落も沼津市西部の一本松や桃里に展開した。このことを鑑みるに、両市の発展の礎の中心は現在の市境付近にあったといえよう。

前節でみた古墳被葬者の評価は、富士市は富士市、沼津市は沼津市、それぞれに研究が進められていたものであるが、行政区分を取り払って両市の学芸員が「愛鷹山南麓の古墳群および集落」という同一の視点で遺跡を見ることで、よりその性格が鮮明になってきた。これは連携事業の大きな成果である。

こうした両市の発展において大きな意味を持つ古墳群の保存活用に対し、今後も連携を図っていくことをも目的に、今回の講演会と特別展示は企画されている。講演会では、沼津市では文化財保護審議会委員、富士市では富士市文化財保存活用地域計画策定協議会委員を務められている滝沢誠氏に愛鷹山南麓の古墳群について最新の研究成果に基づいて全体的な評価をしていただくよう依頼した。さらに富士市からは事例紹介とともに沼津市に先行して実施されている最新の研究成果を、そして静岡県文化財課には近年の文化財活用の現状と課題の紹介と古墳の保存活用をテーマにそれぞれ報告いただく。

特別展示では、富士・沼津両市から出土した初公開のものを含む豊富な出土品を展示し、開拓者たちの素顔に迫っている。新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、講演会は無観客となるなど、本企画に参加・見学される方々にはご迷惑をおかけした。ただ、新たな試みとして講演会はYouTube配信となっているため、現地に来られない方もぜひ動画を見て愛鷹山の古墳文化に触れてもらいたい。

（沼津市教育委員会文化振興課）